

## 2022年度 関西学院高等部 学校評価を終えて

関西学院では、学校教育法の改正を契機として初等部・中学部・高等部が互いに連携をとりながら整合性のとれた学校評価を実施する制度を構築してきました。また、関西学院が幼稚園から大学院まで連なる総合学園である強みを生かし、接続する学校の教員でもある先生方に、専門的な視点からのご意見をうかがうことで、第三者評価と学校関係者評価の両方の性格を併せ持つ「第三者評価／学校関係者評価」を導入しています。今年度は高等部内の自己評価に対して、教職教育研究センター教員、千里国際中等部・高等部校長からの第三者評価／学校関係者評価をいただきました。

関西学院独自の評価項目として「キリスト教主義教育の実践」を設定し、学校評価ガイドライン（文部科学省、平成28年改訂）で示された学校運営における12分野の項目の中から、「教育課程・学習指導」、「生徒指導」を選び、さらに高等部は重点的課題として、「教育環境整備」、「人権教育」を設定して実施しました。また、文部科学省から採択を受けたワールドワイドラーニングコンソーシアム支援事業終了後も事業内容を継承していくことから「国際理解教育」を継続しました。また、アンケート調査に関西学院のスクールモットー“Mastery for Service”についての質問を「学院共通項目」として加え、そして今年度も「学校のコロナ禍についての対応」についての質問を設定しました。

2022年度の学校評価実施にあたっては、それぞれの評価項目について生徒・保護者・教員のご意見を伺うためにアンケート調査を行い、客観性を高める工夫をいたしました。今年度の回収率は、生徒1,146人・100%（前年度回収率99.6%）、保護者913人・79.7%（前年度回収率68.9%）、教員56人・100%（前年度回収率100%）でした。

今年度も、各項目の生徒・保護者・教員からのアンケート結果を参考に、現状の説明・評価・分析をいたしました。そこから見出せる高等部の課題を明らかにして、第三者評価者の評価を基にしながら今後の改善につなげていく所存でございます。

2023年4月14日  
関西学院高等部  
部長 枝川 豊

## 学校評価

### 教育理念・使命・目標

高等部の教育目標は「イエス・キリストを通して、人と世界に仕える使命感と実力を養い、豊かな心と真摯な態度を備えた人格を培う」としている。礼拝、聖書科授業、宗教的行事を通してイエス・キリストから生き方を学び、他者に、社会に、世界に対して仕えるためであるという関西学院のモットー「Mastery for Service」を体現する世界市民の育成をめざす。一貫教育を柱として、大学で学ぶ力を身につけ、多様な社会の要求に応えうる総合的な人間力を養う。

2019 年度、文部科学省より拠点校として採択されたワールドワイドラーニングコンソーシアム構築支援事業（WWLC）終了を受けて、その事業内容を継承し、性別、年齢、国籍など様々な違いを超えてお互いの個性、人格、多様性を認め合い、「凡ての人に仕える」、「地の塩、世の光」として、「平和な社会を築く担い手」となる世界市民を育成する。

### 2022 年度の評価項目

- キリスト教主義教育の実践：高等部の教育の根幹をなすため、毎年の評価項目として設定している。
- 教育課程・学習指導：重要項目であり、生徒の「学び」が確かなものになっているか、そのためのカリキュラム編成になっているか、検証のために評価項目として設定している。
- 生徒指導：規律ある生徒の生活環境、および安心して学べる生活環境が整えられているかを検証するために評価項目として設定している。
- 教育環境整備：共学化になり引き続き生徒数増加、女子生徒の入学に対応するための設備を整備することは重要であり、快適な学習環境を保证するために評価項目として設定している。
- 人権教育：重要項目であり、グローバル社会において人権を尊重し、多様性が受容される環境が整っているかの検証のために評価項目として設定している。
- 国際理解教育：WWLC 後継事業を通して生徒の国際理解を深めるため、評価項目として設定している。

### 2022 年度の評価項目とテーマ、自己評価、目標、具体的な取組の状況とその効果に対する評価、今後の方策

評価項目 【テーマ】	キリスト教主義教育の実践 【キリスト教主義教育の理念の共有・実践】	自己評価	A
目標	建学の精神の体現		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 生徒のキリスト教に関する理解の向上を目的とした活動を今年度も引き続き行った。その結果、生徒（問 4）「高等部の教育にとって、キリスト教はその土台であると思う」で肯定的な回答を 82.7%（昨年度 80.9%）、生徒（問 5）「礼拝の時間は大切だと思う」で 76.8%（昨年度 73.2%）、生徒（問 6）「聖書の言葉は共感できる部分がある」で 78.4%（昨年度 76.8%）を得た。昨年度もそうであったが、前年と比較してみるとすべての項目で評価が高い。これはコロナ禍にあって、方法は変わっても礼拝などを淡々と続けてきたことによるものだと考える。</li> <li>● 自由出席である早朝祈禱会（火曜日 8:10）の出席状況の向上を毎年目標としているが、平均出席 189.1 名（昨年度 116.0 名）と大幅に増加した。2019 年度（コロナ禍前）が平均出席 125.7 名であることを考えても大幅な増加と言える。</li> <li>● 学校外のキリスト教関連団体（教会・ボランティア）との連携・関心を高めるため、6 月から降り始めたモンスーンの影響で被災しているパキスタンのため</li> </ul>		

	<p>の献金、熱海・伊豆山地区での被災地ボランティア、子ども食堂でのボランティア、神大附属病院に長期入院する子どもたちとの Zoom での交流会、コンタクトレンズケースのリサイクルなどの活動を行った。その結果、生徒（問 7）「高等部は、キリスト教関連団体（教会・ボランティア）に関心を持っている」で肯定的な回答が 74.3%（昨年 72.8%）と、昨年度同様、前年と比較して評価が高い。ボランティア委員会には、現在 30 名の委員がいる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 保護者（問 4）「高等部が実施しているキリスト教主義教育は、子どもの人間的成長に寄与している」の肯定的な回答の割合は 88.3%（昨年 84.7%）と多くの保護者が昨年同様強い関心を示した。保護者の方へのキリスト教理解の取組の一環として、保護者の集いの一つである「聖書を学ぶ会」を行っている。その出席者数もコロナ禍でも現状維持している。</li> </ul>
今後の方策	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 昨年度同様、すべての項目で増加という評価を受けて、「逆境にこそキリスト教教育が求められている」ということを再認識した。創立以来、大切にしてきたことを守っていく強さが問われていると考える。</li> <li>● まだまだコロナ禍で、近隣教会の牧師をお呼びしにくい状況にはあるが、関西学院内のクリスチャン教職員に今以上に奨励を依頼し、魂の育成に励む。</li> </ul>

評価項目 【テーマ】	<p><b>教育課程・学習指導</b> 【関西学院大学への院内推薦制度に基づく学校として、その制度を活かし、基礎的な学びの上に、主体性や探究型などの時代に適応した学びを実現するカリキュラムや、生徒が積極的に選択できる進路指導の仕組みが構築されているか】</p>	自己評価	B
目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 接続する大学で主体的に学ぶ力を保証し、多様化・不安定化する社会に対応できる学びの力や姿勢を習得する。具体的には「1. 基礎学力の向上」、「2. 課題を発見し、解決策を考える探究型の学びを深める」、「3. 興味や関心に応じて深く学ぶ」を目標として掲げる。</li> <li>● 学習に躓きのある生徒には補習などきめ細やかな対応をする。</li> <li>● 的確な自己分析と、大学に関する情報収集を結びつけ、学びたいことや将来のビジョンに即した進路選択と、その実現に向けた指導を行う。</li> </ul>		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	<p><b>(具体的な取組の状況)</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 1 年生からの新学習指導要領、観点別評価の導入にあわせ、多様な評価を行うために、改めて教科の教育目標を明確化する取組を始め、さらに学校の教育目標を再定義する意識付けとした。</li> <li>● 基礎学力向上の取組として、2021 年度から追加した数学、英語の補習をあわせ、1 年生から 3 年生までの継続的なサポート体制ができ、未修得単位の回復と基礎学力向上に努めた。</li> <li>● 主体的な学び・探究型の学びについては、WWLC の経験を探究科目に活かし、2 年間連続の選択 3 科目 (AI 活用、ハンズオンラーニング、グローバルスタディ) を中心に、生徒の主体的な学びの過程 (知識獲得・課題発見・考察・議論・実践・発表など) や教員による評価の仕組みについての実践と蓄積を重ねた。また、1 年生の終盤から 2 年生にかけて、学年全員が地元地域の活性化策立案に取り組む地域探究のプログラムを実施した。</li> <li>● 進路指導充実のため、WEB の自己分析ツールの使用や、進路情報の収集・整理、自己分析との関連付けを意図したワークブックなど、3 年間を通して進路</li> </ul>		

の意識を積み上げる仕組みを取り入れ、運用を始めた。

**(取組の効果に対する評価)**

- 今年度から学習指導要領が改訂され、学校としても探究型の要素を本格的に充実させるようになり設問を再編した。新たな設問は、新学習指導要領に則った主体的な学びや探究的な学びを取り入れつつ、かつ、関西学院高等部らしさを実現できる学びの構築と、そのための教科・学校の教育目標の策定と評価体制の構築、院内推薦を核とする学校としての的確な自己分析や学びの意識を持たせた進路指導を意識した。今後は、これらの新たな設問の結果は重要な指標となる。
- 進級・推薦・卒業、進学などに関する説明については、生徒、保護者とも否定的な認識が減じて改善傾向にあり、取組を継続する必要がある。
- 高等部らしい学びの再定義に関して、「適切な知識・技能の定着」において保護者から一定の理解を得られている(保護者(問6)の肯定的な回答が87.2%)ほか、生徒からも良い印象(生徒(問11)の肯定的な回答が83.8%)がうかがえる。ただし、生徒が何を以て高等部らしいと考えているのかは精査する必要がある。一方、教員では強く肯定的な認識が他よりも弱く(教員(問15)30.4%)、教員でも課題と感じている傾向は強いと考えられる。
- 学力の保障や興味関心に応じた学びについて精査するため、今回から設問を補習と選択授業に分けたが、選択授業については生徒、保護者とも好印象だったのに対し、補習については肯定的な認識が低い(保護者(問7)の否定的な回答が25%超)。補習については教員においても否定的な認識が比較的強い(教員(問16)20%超)。
- 授業の工夫については、教員からは教材研究などにおいて肯定的な認識が強いものの、生徒からは否定的な認識も根強く(生徒(問10)25%超)、両者においてギャップがあり、教員として意識していく必要がある。
- 関連して、「知的好奇心」というキーワードを追加して興味深い授業について質問を設定したが、否定的な認識が一定数あり(20%超)、今後重要な指標として捉え考えていく必要がある。
- 学ぶ姿勢に関わる社会課題への関心と取組の姿勢については、保護者、生徒とも前進し、一定の評価ができる。
- 生徒の自己分析、その表現と進路指導への活用といった分野では、保護者(問12)、生徒(問19)、教員(問22)のいずれにおいても否定的な認識が強く(保護者、教員はともに25%超、生徒も20%超で自覚している)、大きな課題である。
- 教員の教育活動全般においては概ね良好な回答で、自信をもって教育活動に当たっていることが分かる。一方で、今年度から導入された新学習指導要領にあわせての教科の教育目標策定や適切な評価については他よりも肯定的な認識は弱い。

**今後の方策**

- 学力の保障については、これまでの仕組みを継続することは大前提として、生徒の学力の変化にあわせ、さらなる充実が必要となる。
- 新学習指導要領の適用学年が順次拡大していくので、教員間で観点別評価を筆頭に、新たな学力観の徹底が必要になる。観点別評価の導入とあわせて、そのために必要な教科の教育目標策定を促していく。
- 生徒の自己分析、その表現と進路指導への活用といった分野では、保護者、生徒、教員のいずれにおいても否定的な認識が強く(保護者、教員はともに25%超、生徒も20%超で自覚している)、大きな課題である。3年間通しての

	<p>プログラムも運用し始めた初期で、成果が出るにはまだ時間も掛かり、プログラムの内容についても常にブラッシュアップが求められる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 生徒の自己分析、その表現と進路指導への活用といった分野は、新たな教育目標やカリキュラムの構築と並んで、今後の二大重要課題といえる。進路指導担当だけで完結する内容ではなく、大学との連携や、日常的な教科指導でもその要素を取り入れての指導が必要であり、教務部を中心に各所との連携、教員間での意識の共有が必要である。</li> </ul>
--	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

評価項目 【テーマ】	生徒指導 【自主性を育み、気持ちよく集団生活を送るための生活指導を徹底】	自己評価	A
目標	学校生活のルールを守り、他者を気遣い、規則正しい生活習慣を養う。		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	<p>(具体的な取組の状況)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 前年度に続いて新型コロナウイルス感染防止に対する注意喚起を徹底して、皆が安心して学校生活を過ごせる環境の提供に尽力した。具体的には注意点を分かりやすくまとめた用紙をクラスや食堂などに掲載し、Classi で配信した。</li> <li>● ルールやマナー向上に努める啓発を HR や終礼を通じて担任から行い、その具体的な事項や変更点は Classi を有効利用することで徹底した。</li> <li>● いじめや不正に毅然と対応し、誰もが安心して楽しく過ごせる生活環境を整えた。</li> <li>● 登下校通路における工夫が必要であることから、学院ともタイアップしながら対応を行う。しかし残念ながら登下校時に広がって歩くことや、横断するタイミングが長いなど苦情が続いた。よって登校時の見守り隊の方に、横断するタイミングを歩行者最優先から少しドライバーの時間を長くしていただくよう調整して頂いた。それに加えて生徒部の教員も巡回してマナー向上に努めた。</li> <li>● SNS の利用に際し、大人からの使用上の注意喚起とともに生徒発信の取組にも重点をおく。特に生徒主体の ICT 委員会から、生徒に対して使用上の問題点・改善すべき点の講演を行った。</li> </ul> <p>(取組の効果に対する評価)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 新型コロナウイルス感染症の対策は具体的なアンケート項目として出していないが、学校として守るべきルールやマナーを指導しているか、という項目は生徒・保護者とも昨年度より大幅に向上している。特に守るべきルールが明確になったという項目では、具体例を出して掲示やアナウンスしたことより、生徒（問 24）は約 17 ポイントも向上。保護者（問 17）も約 7 ポイント向上している。情報の伝え方の大切さが窺えた。</li> <li>● 学校はいじめに毅然として対応している、という項目は、残念ながらいじめ事案が発生したものの、その対応に関しては生徒・保護者の平均で 5 ポイント向上している。迅速にかつ明確に学校の方針を出すことが大切との評価を受けた。</li> <li>● 問題行動が起きた際の学校側対応について、生徒・保護者ともに平均 5 ポイント向上した。対応には様々な意見はあるが評価を受けたと考えられる。</li> </ul>		
今後の方策	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 自律した学校生活を送るため、ルール・マナーの意識向上に対して、更に具体的な指導を行う。そのため学校側から一方的な発信だけでなく、生徒の方</li> </ul>		

	<p>から自主的に発信できる組織を作り、自治を促したい。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● いじめや不正を許さない環境づくりに向けて、更に講習会の内容を精査して生徒の実態に即した内容を採り入れたい。また SNS の使い方に関する指導は、関係機関と打ち合わせし、より具体的な事例や実際に同年代が巻き込まれた案件なども紹介し、危機感を生徒へ醸成したい。</li> <li>● さらに登下校マナーの向上にも引き続き取り組む。これは登下校のピーク時に生徒の努力で改善できない事情（道幅・車の通行量）などもあるが、社会の一員として守るべき行動規範をさらに教育したい。</li> </ul>
--	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

評価項目 【テーマ】	教育環境整備 【生徒・教員の学びを促進する学校設備の整備・改善】	自己評価	A
目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 新しい学びに対応した施設・設備の充実を図る</li> <li>● ICT・アクティブラーニングなどを活用した、新しい時代の教育に対応できる教育環境をハード・ソフトの両面において整備する。</li> </ul>		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	<p>(具体的な取組の状況)</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 引き続き、生徒・保護者・教員の意見を聞きながら校舎の整備と維持・管理を行った。今年度は大きな施設・設備の改修や新設はなかったが、生徒総会での問題提起を受けての男子用更衣スペースの設置・進路コーナーや面談スペースの整備等、より生徒の声を重視した整備に取り組んだ。</li> <li>2. ICT 環境については、常駐の ICT 支援員のサポートにより、機器・ネットワークの運用や、1 人 1 台タブレット環境下での生徒・保護者へのサポートについても順調に推移している。環境整備としては、大学で不要となった什器や機器を利活用し、アクティブラーニング用教室を構築し試験運用を開始した。</li> </ol> <p>(取組の効果に対する評価)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 今年度も高等部の教育環境整備に関連する殆どの質問項目（生徒(問 27、29、30)、保護者(問 20～21)、教員(問 33、34、36)）について、90%を超える高い肯定的評価を示している。引き続き本校の教育環境の整備が概ね順調に進められていると判断して良いと考える。昨年度肯定的評価が大幅に下落し、懸案としてあげた生徒と教員に共通する質問「男女共学化、生徒像に応じた施設・設備（トイレ・更衣室・食堂など）が十分整備されている(生徒(問 28)・教員(問 35))」においては、今年度は対昨年度比で、生徒:72.2%→82.1%、教員:64.2%→62.5%となった。生徒については約 10 ポイント上昇し、今年度の取組が評価されたと考えられるが、抜本的な解決に至る取組とは言えないため、引き続き教員からの評価は下落している。</li> <li>● ICT 環境の整備・運用が順調であることは、関連する質問（生徒(問 29～30)・教員(問 38～39)）にて共に肯定的評価が 90%を超えていることから確認できる。昨年度と比較して、教員（問 39）「高等部は生徒 1 人 1 台環境を有効に利用している」において、90.6%→94.7%と約 4 ポイント上昇したことが特筆に値する。教員の ICT 活用能力（問 40:88.7%→89.3%）が安定してきたことにより、より活用が進んだと考えている。</li> </ul>		
今後の方策	<p>施設・設備の整備についてはこれまでと変わらず、良好な維持、管理を続ける。しかしながら、高等部校舎は建設から約 30 年が経過し、様々な点での老朽化が進み、生徒・教員のアンケート結果にもある通り、今後の高等部が目指す新たな学びを実現するのが難しくなっていることも感じている。探究型のカリキュラムを柱とした高等部教育を見直す過程で、高等部校舎においても、その教育を実現するために必要なハード整備を軸とした抜本的なリニューアル計画を来年度は考</p>		

	えていきたい。
--	---------

<b>評価項目</b> <b>【テーマ】</b>	<b>人権教育</b> <b>【3年間の人権教育シラバス策定と、希望者を募った実践的アクティビティの模索】(重点)</b>	<b>自己評価</b>	<b>A</b>
<b>目標</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 能力・資質にかかわらず、神に愛されている存在としての自尊感情を培う。</li> <li>● 日常に潜む自他への人権侵害(いじめ、暴力、偏見)に対し、毅然として立ち向かう人権感覚を持つ。</li> <li>● 国籍、人種、民族、出身地、宗教、身体的・精神的特徴、セクシャリティの多様性(ダイバーシティ)を受け入れる柔軟で幅広い人間観を持つ。</li> <li>● 貧困、差別・偏見、抑圧など、社会的不公正による人権侵害に関心を持ち、虐げられている人々に対する共感的視点を持つ。</li> <li>● 歴史的視野に立って過去を謙虚に見つめ、平和を希求しこれを作り出す歩みに参加する。</li> </ul>		
<b>具体的な取組の状況とその効果に対する評価</b>	<p><b>(具体的な取組の状況)</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 昨年度に引き続き「三年間の人権教育シラバス」を作成し、全教員で共有した。「人権教育シラバス」とは、各教科担当に、教科教育における人権関連の実践テーマを「基本的人権・民主主義」「差別・暴力・いじめ」「多文化共生」「貧困・格差」「戦争・平和」「ジェンダー・セクシャリティ」「いのち・こころ・からだ」の7項目に分類して提出して頂き、それを一覧表にまとめたものである。今年も多くの先生方に協力を頂き、「水平社設立100年」(政治経済)、「感染症の歴史と差別」(世界史)、「手話ダンス」(保健体育)、「BOP ビジネスと貧困問題」(英語科)、「ハンセン病」(選択人間福祉)など、各教科教育において、現代の情勢を踏まえた様々な人権課題が取り上げられていることがわかった。</li> <li>● 今年も各学年で、多様な人権プログラムを実施した。プログラムの一環として実施した講演会では、セクシャルマイノリティの社会人の方、障がい者自立支援センターで活動する障がい者の方、ひとり親家庭のこどもを支援する塾を運営しておられる方など、様々な当事者の方をお招きしてお話を伺った。この講演会が生徒の関心を喚起し、新たな「気づき」を与えたことは、プログラム後のアンケートでもうかがえた。人権プログラムの方法も、昨年までコロナ感染予防の影響で出来なかったグループワークを少しずつ再開することができた。</li> <li>● 今年度は特に希望した数名の生徒と共に、夏休みを利用して障がい者自立支援センターを実際に訪問し、障がい者の方々と交流の機会を持つことができた。参加した生徒の中には、これを機に大学で福祉を学ぶ決意を固めた者もあり、有意義な機会となった。また、人権プログラムをきっかけに、部活動引退後、障がい者自立支援センターで介助者のアルバイトをする者も数名おり、このプログラムを始めてからの良い伝統として先輩から後輩へと引き継がれている。</li> <li>● 学校評価アンケート生徒(問33)において、「人権プログラムを中心に、高等部はさまざまな人権問題について意識を高める教育を行っている」という項目に関し、生徒の肯定的評価は前年度82.9%から今年度90.5%に増加している。また、保護者(問24)において、「生徒自身が種々の人権問題について、</li> </ul>		

	<p>より関心を持つようになったと家庭で感じる」という項目に関する肯定的評価は、前年度 62.4%から今年度 71.0%へと大きく増えている。生徒の人権プログラムにおける学びが、家庭での「分かち合い」に繋がったことが想像され、良い傾向であると感じられる。一方、教員（問 44）において、「人権プログラムを中心に、高等部はさまざまな人権問題について意識を高める教育をおこなっている」という質問への肯定的評価は、88.4%から 85.8%に微減していることは真摯に受け止め、人権プログラムの意義に関し、教員間で一層の共有をはかる必要を感じる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 今年は全学年一斉で、9月に「いじめアンケート」を実施した。アンケートで明らかになった事例については学年団・人権教育推進委員会・生徒指導部が情報を共有しつつ、慎重に対応した。「高等部としていじめの問題を把握し、その防止に取り組んでいる」という項目に関する肯定的評価は、生徒が前年度 78.5%に対し今年度 86.8%、保護者が前年度 82.3%に対し今年度 89.1%といずれも増加する一方、教員が前年度 94.3%から 92.9%と微減となった。いじめアンケートの形式や事後対応について、更に検証・改善を進め、いじめの早期発見とその防止にひき続き学校をあげて取り組む必要がある。</li> </ul>
今後の方策	<ul style="list-style-type: none"> <li>● キリスト教教育・教科教育と連携した人権シラバス作成の継続と、教科横断的人権プログラムの模索ホームルーム活動と連携した生徒の主体性を尊重する対話的な人権プログラムの実施。</li> <li>● 希望者を募った実践的アクティビティ（施設訪問・フィールドワーク等）の継続。</li> </ul>

評価項目 【テーマ】	国際理解教育 【国際的な諸問題を含む国内外の社会的課題の解決への関心・意欲の育成】（重点）	自己評価	B
目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 文部科学省から採択を受けた3年間(2019-2021)のWWLCを自走、継続する形で、授業や課外活動などの学校全体の様々な教育活動を通して、SDGsに代表されるような国内外の社会的課題の解決に主体的に関わろうとする姿勢や、多様な価値観を学ぼうとする意識を育む。</li> <li>● 国内外で開催される国際交流プログラムを紹介し参加を促すことを通して、国際理解に関わる学びを深める機会を提供する。</li> <li>● 中期・長期留学、海外語学研修、フィールドワークなどといった国内外での活動への参加を促し、本校でも留学生を積極的に受け入れることで、学校内外での国際交流の場を作り出す。</li> </ul>		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	<p>（具体的な取組の状況）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 今年度は合計19名が海外留学に行った。内訳は以下の通りである。 1学期：オーストラリアへ中期留学生在が3名 2学期：北米への中期留学生在が6名、長期留学生在が1名 3学期：オセアニアに中期留学生在が9名</li> </ul> <p>昨年度の8名から大幅に増えたことは大変嬉しいことであり、海外留学への関心の高さが伺える。昨年度の長期留学から帰国した生徒2名もおり、また中期留学から帰国した生徒は留学生生活をまとめたポスターを教室前の廊に掲示にしている。それぞれが海外で学んだことを関学で還元してくれている。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 海外からの留学生としてインドネシアから1名（AFS アジア架け橋プロジェクト）、アメリカから1名（通常 AFS プログラム）、合計2名を2学期から第2学年で受け入れている。日本の学校生活にもしっかりと適応している。イン</li> </ul>		

ドネシアの生徒は民族舞踊をアッセンブリーでも披露予定であり、アメリカの生徒は ESS 部や数理科学部で活躍するなど、日本国内における異文化交流の場を提供してくれている。

- コロナのために夏休みの海外語学研修は 3 年連続中止となったが、「KGH SUMMER ENGLISH CAMP@TOKYO」と題して 2 泊 3 日の国内英語研修旅行を実施、19 名が参加した（引率教員 2 名）。東京にある英語研修施設、東京グローバルゲートにて海外留学を意識した実践的な英語を 2 日間体験し、最終日は海外からの留学生と浅草をフィールドワークを行うという内容であった。大変好評だったので、22 年度の春休みにも 3 泊 4 日で同様の国内英語研修旅行を実施予定である。
- 様々な国際交流イベントに生徒たちは参加した。夏休みには、関西学院大学が主催する他校の高校生と日本に来ている海外からの留学生との国際交流イベント「高校生国際交流の集い」に 4 名が 2 日間に渡って参加した。大学コンソーシアムひょうご主催の「神戸地域連携プログラム 英語村」には 2 名が参加し、留学生、大学生のスタッフと英語を話す 2 日間を過ごした。本校も協力した ECC が開発した「VR 留学体験英会話レッスン」に 5 名が参加し、次世代の英会話を経験した。関西 NGO 協議会主催「ユースのための国際交流オンラインスタディーツアー：国と国を繋ぎ出合いを通して学びを共有しよう」に 5 日間参加した生徒が 1 名、リベルタ学舎主催の「ワガママ SDGs」に 5 名、FedEx Express/Junior Achievement International Trade Challenge 2022 国際ビジネスプランコンテストに 2 名など、その他様々な課外活動に参加する生徒が見られる。
- 探究型カリキュラムにおいては、教育目標を「SDGs の達成を目指し、“Mastery for Service” を体現する世界市民の一員として、国内外の社会に自ら関わり貢献できる力を身につける」と設定し、各授業を中心に様々な取組、イベントが展開された。以下は一例である。
  - 1) 2、3 年の「グローバルスタディ」においては、Zoom を通じて定期的に海外の高校生と積極的に意見を交わしながら協働プロジェクトに取り組むなど、国際的な視点を得ながら学びを深めた。
  - 2) 2、3 年の「ピーススタディ」「ハンズオンラーニング」において、2 年生は昨年同様長崎の街と鎮西学院を 1 泊 2 日で訪れ、平和についてフィールドワークを通して考える機会を得た。3 年生は原発を主なテーマとするエネルギー政策についての知見を深め、日本原子力文化財団主催の「2022 年度 課題研究活動発表」に研究費を得て参加し、見事最優秀賞を受賞する成果を得た。
  - 3) 2、3 年の「AI 活用」は関西学院大学工学部の教授、ゼミ生の指導をいただきながら AI を用いた社会課題解決に取り組んだ。3 年生は 2023 年 2 月に開催される教育と探求社主催の「クエストカップ」での受賞を目指して取り組んでいる。
  - 4) 1 年生の「探究 Basic」においては、例年同様、自分たちの関心のある社会課題に実際に取り組んでいる地方自治体や企業などを訪れ、インタビューを行うなどのフィールドワークを行った。
  - 5) 9 月には、探究型授業受講者の生徒を中心に生まれた委員会「Small Steps of People (SSP)」が、International Online Meeting というオンライン国際会議を企画、運営し、「私たちの生活と SDGs」と題して様々な国々の高校生とオンラインで英語での議論を行った。全校生徒にも呼び掛けるなど、SSP の活動の枠が少しずつ広がっている。

- 6) 1、2年生の学年行事として、今年度もSDGsについて理解を深める学年行事を開催した。1年生はカードゲームを用いて楽しくSDGsを学び、2年生は「地域探究」と題して、地方自治体が抱える問題（ミッション）を、グループごとに実際にその地域を訪れて解決方法を探り、発表するという活動を行った。
- 7) 12月には高等部主催、Classiと関西学院大学の後援で「中・高生 探究の集い2022」を開催した。全国から45校、300名程度の生徒と教員が参加し、各学校の探究活動をコンテスト部門、オープン部門（ポスター発表）で披露した。高等部からは3グループがエントリーし、SSPの生徒が運営に関わった。発表だけでなく、生徒交流、教員交流も実施し、参加者全員にとって学びの多い一日となった。来年度も開催予定である。

#### （取組の効果に対する評価）

- 「授業や行事を通じて国際的な問題や世界の出来事などに興味・関心が強くなってきたと感じる（生徒）/高める努力をしている（保護者・教員）」という項目について、生徒（問34）は81.4%（昨年比+6.7）、保護者（問25）は84.1%（昨年比+6.9）、教員（問45）は94.7%（昨年比+6.3）の肯定的な回答を得た。昨年度よりも上昇しており、教室内外での活動の広がり、SDGsに関わる学校、学年行事など、多層的な取組が生徒たちの意識に少しずつ届きつつあると感じる。
- 「授業や行事活動で、語学力や国際性を身につけることができるプログラムなどが高等部で提供されている」という項目について、生徒（問35）は84.0%（昨年比+2.8）、保護者（問26）は84.9%（昨年比+10.6）、教員（問46）は96.4%（昨年比+9.9）となっており、昨年度よりも高い水準で肯定的な回答を得た。英語科の授業で導入している年10回のWeblioオンライン英会話授業も2年目を迎え、1対1での英会話が当たり前になってきたと感じる。国際性については、対面の国際交流イベントも増え関心を持って参加する生徒も増えつつある。さらに様々な機会を提供していきたい。
- 「将来、機会があれば留学や渡航をしたいと感じている（生徒）/意欲を育てている（保護者・教員）」という項目について、生徒（問36）は72.4%（昨年比+2.5）、保護者（問27）は74.4%（昨年比+13.1）、教員（問47）は96.4%（昨年比+19.5）が肯定的な回答であった。生徒たちの意識はそう変わらないのは残念であった。しかし、保護者、教員の回答が大幅に上昇したことから分かるように、海外に行ける機会がコロナの規制が少しずつ緩和されることで実質的に増えている現実があるので、生徒たちの意識がより海外に向くように促したい。実際に、今年度は留学に行った生徒も1年間で20名近くになり、国内語学研修が実施できたこともある。高等部で受け入れている海外留学生も含め、身近に海外に行った生徒や国際感覚を身につけようとする生徒が増えることが、海外に行きたい気持ちをさらに強めると考えられるので、より積極的に生徒たちに働きかけていきたい。
- 「授業や行事などを通して、生徒が社会的課題に対して関心を持ち、取り組もうとする姿勢を育てている」という項目については、生徒（問15）84.6%（昨年比+5.5）、保護者（問9）は90.8%（昨年比+7.3）と、両者共に「強くそう思う」が7.3%増えるなど、一昨年から右肩上がりである肯定的な回答を昨年度より多く得ることができた。教員（問18）についても91.1%（昨年比+6.7）と同様である。学年行事、国際交流部、探究型授業の取組など、全学的に広がり続けているこの傾向を維持し、今後もさらに質の高いものにしていく

	い。
今後の方策	<ul style="list-style-type: none"> <li>● WWLC での探究型カリキュラムの取組を自走する1年間であったが、対内外的にも一定の成果を得ることが出来た。来年度は探究型授業をさらに増やすことを構想しているが、社会的課題に対してより関心をもって解決に向けて実際に取り組むことのできる実践的な機会を生徒たちにさらに提供していきたい。</li> <li>● 新型コロナウイルス感染拡大に伴う行動制限が緩和されつつあるので、国際理解を積極的に図ろうとする姿勢を、対面の国際交流プログラム、国内外の国際交流プログラムを継続して積極的に企画、提供することでより一層育んでいきたい。</li> </ul>

(自己評価)

A+=テーマに対する目標を達成した。

A=テーマに対する目標を概ね達成した。

B=テーマに対する目標の達成に向けた計画や方策などを実行しているが、達成にはまだ時間がかかる。

C=テーマに対する目標の達成に向けた計画や方策などを実行していない。

## 総合評価

今年度も新型コロナウイルス感染症が終息を見なかったが、生徒・保護者共に高等部の新型コロナウイルス感染拡大防止対策を受け止め、その対応への理解を示していただいていることが伺える結果であった。また、制限・制約が緩和されてきたことにより、教育活動においてコロナ禍前にできるだけ近づけていったことや、生徒・保護者・教員とのコミュニケーションを図る機会が増えたことから、評価についての向上が様々な項目において表れ、「強くそう思う」の割合も全般的に増加した。

生徒・保護者・教員ともに関西学院でのキリスト教主義教育の理念が今年度も確かに共有され、高等部教育において重要な位置づけにあることが理解されていると言える。全校生が礼拝堂に集う全校礼拝も2学期後半から3年ぶりに復活し、讃美歌も歌えるような状況に転じたことも大きな変化であった。

教育課程・学習指導に関しては、学習指導要領改訂や観点別評価の導入などに伴い、また文科省指定事業、ワールドワイドラーニングコンソーシアム構築支援事業(WWLC)終了から、その事業内容を継続し、高等部教育の柱とすべく更なる発展を図るために、探究型授業の一層の深化を目的とした「探究型カリキュラム委員会」を設置したことを受けて評価項目の変更・追加を行った。まだ、その内容等が浸透していないことでの評価が数値としても表れているが、今後の検討課題として認識し、経年での分析を継続していく必要がある。ただ、方向性としては整っており、校内研修も重ねていることから、教員も課題感をもって、その方向性を共有しながら改善を進めていることも読み取れる。補習についての評価は「メンター制度」の充実を図りつつ改善されることを期待する。

進路指導、関西学院大学への接続に関する情報については、今年度はその伝達機会が増えたことにより生徒・保護者・教員とも情報を得られているという実感を持っているという結果が得られた。ただ、AiGrowの活用や、3年間を通じたより自己の進路を深く考える進路指導の在り方の改善を図る必要があることが評価結果から窺える。

生徒指導面においては、感染症拡大防止のための対策にかかるマナーについては生徒の中でかなり定着が図られている。特に守るべきルールの伝達の方法も改善が加えられ、明確化させたことで生徒・保護者にもプラスの影響として表れていることが評価結果から見てとれる。また、問題行動やいじめに対する姿勢や対応についても、より良い評価を得ていることから、様々な取組が功を奏していると考えられる。しかしながら、日常生活での登下校時のマナーを含め、集団での移動時における生徒の意識向上にはまだ課題が残っている。その都度指導を入れているが、大きな効果は得

られておらず今後の改善事項となる。

教育環境に関する質問に対しては生徒・保護者・教員の多くが整備されていると回答し、満足感を得ている。ICT環境についても生徒・保護者・教員が教育活動における環境が整い、十分に活用されているとの認識があることが評価結果からわかる。ただ、男女共学化が完全に定着した現在、女子生徒のみならず男子生徒の中にも男女共学化、定員増に対する施設・設備に対する不便さを感じているが、生徒の要望を受けて改善も試みたことから評価の改善が若干あった。

学習指導要領の改訂も伴ってICT環境の整備とともに、ソフト面を含めてさらにアクティブラーナーを育成する授業研究を深め、PBL型、探究型授業実践のための環境の改善と実践能力の向上を目指すうえで、築30年以上となる男子校時代に建てられた校舎を、新しい教育の形にあわせたハード面での整備と併せて、抜本的なリニューアルの必要性を強く感じる。

人権教育は、その理解を深めるためのプログラムや様々な形でのアプローチが、生徒に徐々に浸透し理解が深まり、それが生徒自身の行動や保護者とのコミュニケーションの中にも現れてきていることが評価結果から見える。ただ、教員の受け止めのところで十分でないという声があることも事実であることから、人権教育そのものの改善が求められる。ただ、プログラム内容はしっかりと高等部が目指す、インクルーシブでダイバーシティがあるコミュニティー作りには向けられている。

国際理解教育においては、徐々に制限・制約が緩和され、留学プログラムや国際交流プログラムが動き出したことから、昨年度に比べて大きく評価が向上した。特に保護者の受け止め方が大きく改善されてきている。情報伝達アプリを活用して情報の発信も細目にされていることも大きな影響があると考えられる。さらにコロナ禍前の活動までに戻ること、一層の評価の改善が期待できる。

教科横断型の「探究型カリキュラム委員会」設置により、この委員会に関わる教員が増えていくことで、高等部の教育目標がさらに精緻に策定・設定されていくことで、今後の高等部教育全般の改善を推し進めながら「地球と人類に貢献する平和構築のための学び」をもって、関西学院が目指すところのグローバルリーダーである「“Mastery for Service”を体現する世界市民」の育成にしっかりとつなげていきたい。

## 2022年度の評価をふまえて2023年度に予定している評価項目、テーマ等

2023年度は、評価項目としては、高等部の教育の土台となる「キリスト教主義教育の実践」はもちろんのこと、学習内容の中心となる「教育課程・学習指導」の項目、「生徒指導」「人権教育」も評価項目として設定する予定である。また、WWLC事業後に引き続き継承していく「探究型カリキュラム委員会」を立ち上げて、教育改革を実施しているので、ここに係る評価項目は「国際理解教育」と独立させて評価項目の設定をする予定である。男女共学を意識した評価項目を設定していたが、共学化が定着したことから、インクルーシブでダイバーシティなコミュニティーの実現に向けての評価項目の見直しを今年度着手できなかったため来年度の検討課題とする。

## 第三者評価／学校関係者評価

今年度は11月17日に高等部を訪問する機会を得ました。この日は2年生の学年礼拝日で、枝川高等部長先生が奨励を担当されました。高中部礼拝堂で過ごしたチャペルアワーの25分に、高等部の宗教的・精神的基盤と使命、生徒達の母校への愛、教職員の生徒への愛情というものが直接に伝わってきました。それらが高等部の独自性のある文化と伝統を育み、豊かに醸造されていることを感じました。

「高等部らしさ」は、年間を通して様々な発行物からも感じるすることができます。時間と労力をかけて制作された質の高い完成品は、質の高い教育実践と質の高い教職員組織があるからこそ生まれているということも改めて認識しました。

それらのことを数値的にも証明するのが、今年度の学校評価アンケートの結果です。昨年に続き高い回収率を達成し、全体的にほとんどの質問項目で昨年度よりも良い数値をあげられていることは

高等部コミュニティーにかかわるすべての方々の努力とチームワークから得られたものと思います。

生徒指導、教育環境整備、人権教育については、どの学校でも課題の多い領域ですが、今年度も効果のある実践が続けられて A 判定がつけました。また、同じく A の評価をされたキリスト教主義教育の実践については、自由参加の早朝祈祷会の出席率が向上した事例やボランティア活動への関心の高さが挙げられています。この結果から、2023 年度に新たに宗教主事が着任する SOIS で、何をどのように展開すれば良いのかを考察する材料をいただきました。

今年度は SOIS の生徒が高等部生と直接に関わる機会がありました。一方、SIS の教員が高等部の選択授業を担当させていただきました。このような KG ファミリーとしての実質的な交流を来年度も続けさせていただきたいと願っています。

昨年度と同様、新型コロナウイルス感染症の防止対策に万全を期しながら、その制限・制約の中で最大限に可能な教育活動を模索され尽力された一年でした。その教員の努力が、多くの評価項目の向上に表れたのでしょうか。制限・制約が緩和されていく世の中にあって、個々の教育活動をどう実施していくのか、難しい判断が続いたことと推察します。その判断の根底には生徒を思う教育愛があり、その思いが教員をつなぎ、生徒と保護者にも届いた——そのように評価項目の向上を受け止めてよいと思います。世の流れはさらに緩和の方向に向かいそうです。次年度も引き続き難しい判断が続くでしょうが、今年度の成果を礎に、引き続き尽力されることと思われま

す。続いて各評価項目へのコメントです。

<キリスト教主義教育の実践>キリスト教主義教育に対する理解の深まりをうかがうことができました。コロナ禍の中で、キリスト教主義が心の拠り所となっていることの証でしょう。早朝祈祷会への出席率の向上や保護者の「聖書を学ぶ会」の取組など、素晴らしい成果と思われま

す。<教育課程・学習指導>数多くの新たな取組がなされ、その成果は熟しつつあると思われました。新学習指導要領への対応と WWLC の経験の定着に向けて、教員側での体制が整えられ、方向性も共有されたようです。その成果は授業の改善などにつながることができます。教員と保護者のアンケートからは補習等の充実が課題のように見えますが、こちら「メンター制度」の定着などによって改善されるものと思われま

す。<生徒指導>基本的なルール・マナーの指導とトラブルへの対応に関して、生徒・保護者ともに評価が向上しています。高く評価できると思われま

す。<教育環境整備>よく整備されており、高く評価できます。アンケート項目「男女共学化、生徒像に応じた施設・設備（トイレ・更衣室・食堂など）が十分整備されている」に関しては、ソーシャル・ディスタンシングなど、コロナ禍による生活習慣の変化などとも関わっているでしょう。今後の動向にも対応しつつ、必要な整備が進められるものと期待しま

す。<人権教育>人権問題への意識の浸透がよくうかがえるアンケート結果でした。高く評価できると思われま

す。<国際理解教育>この評価項目はコロナ禍において最も難しいものだったと拝察しますが、国際理解の様々な機会を提供する教員の尽力、そしてその機会に意欲的に参加した生徒の姿、非常に高く評価できると思われま

引き継がれ、発展していくことを期待しています。

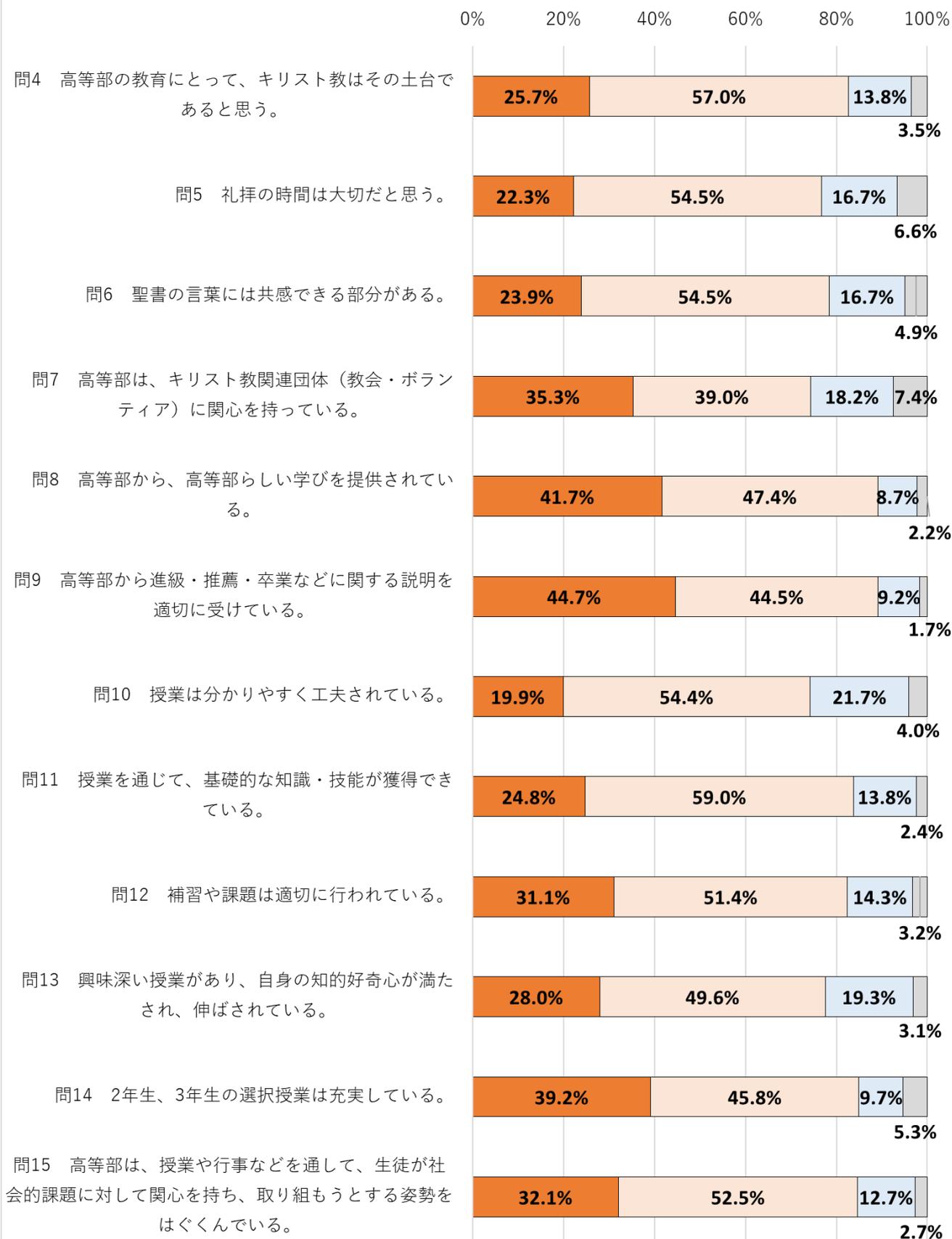
最後に2点ほど。

<「高等部らしい学び」について>評価員は高等部への訪問時に探求型授業の発表を拝見しましたが、その発表の随所に生徒の人権意識の高さを感じました。「人権意識を基盤として社会的課題に気付き、自ら学びを深めていく」ところに、<教育課程・学習指導>でも触れられていた生徒たちの「高等部らしい学び」を垣間見たように思います。

<「生徒同士のつながり」について>新型コロナウイルス感染症対策による制限・制約が緩和していく中、おそらく大きな課題となるのが「生徒同士のつながりの再構築」でしょう。部活引退後のボランティア参加という伝統や、留学経験者から未経験者へのノウハウの継承など、生徒同士の自発的なつながりがいかに再構築されていくか、見守りながら支援していただきたいと思います。

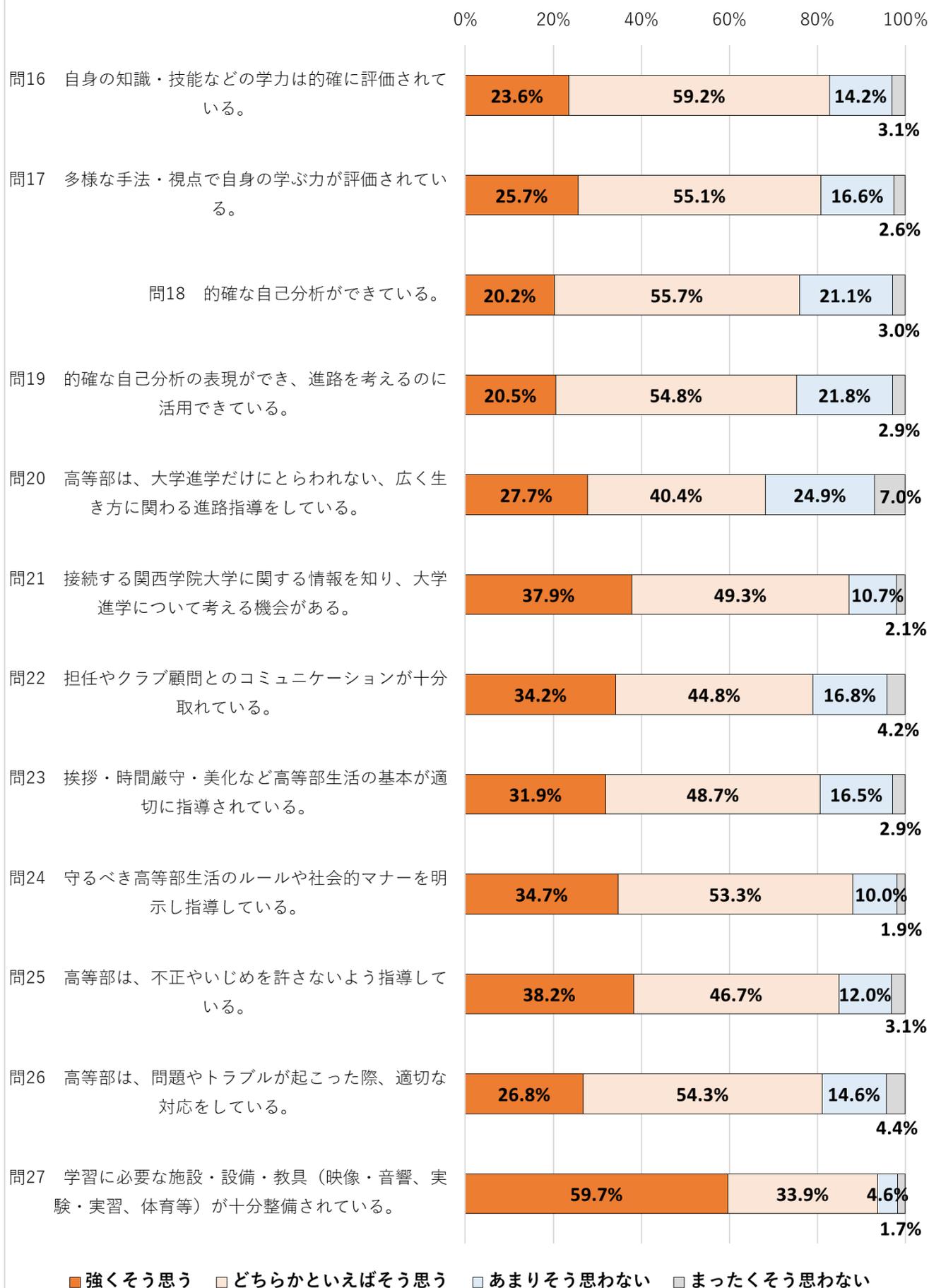
2022年度学校評価

**2022年度 学校評価アンケート集計結果**  
**高等部・生徒（回答率100% 回答1,146人/対象1,146人）**



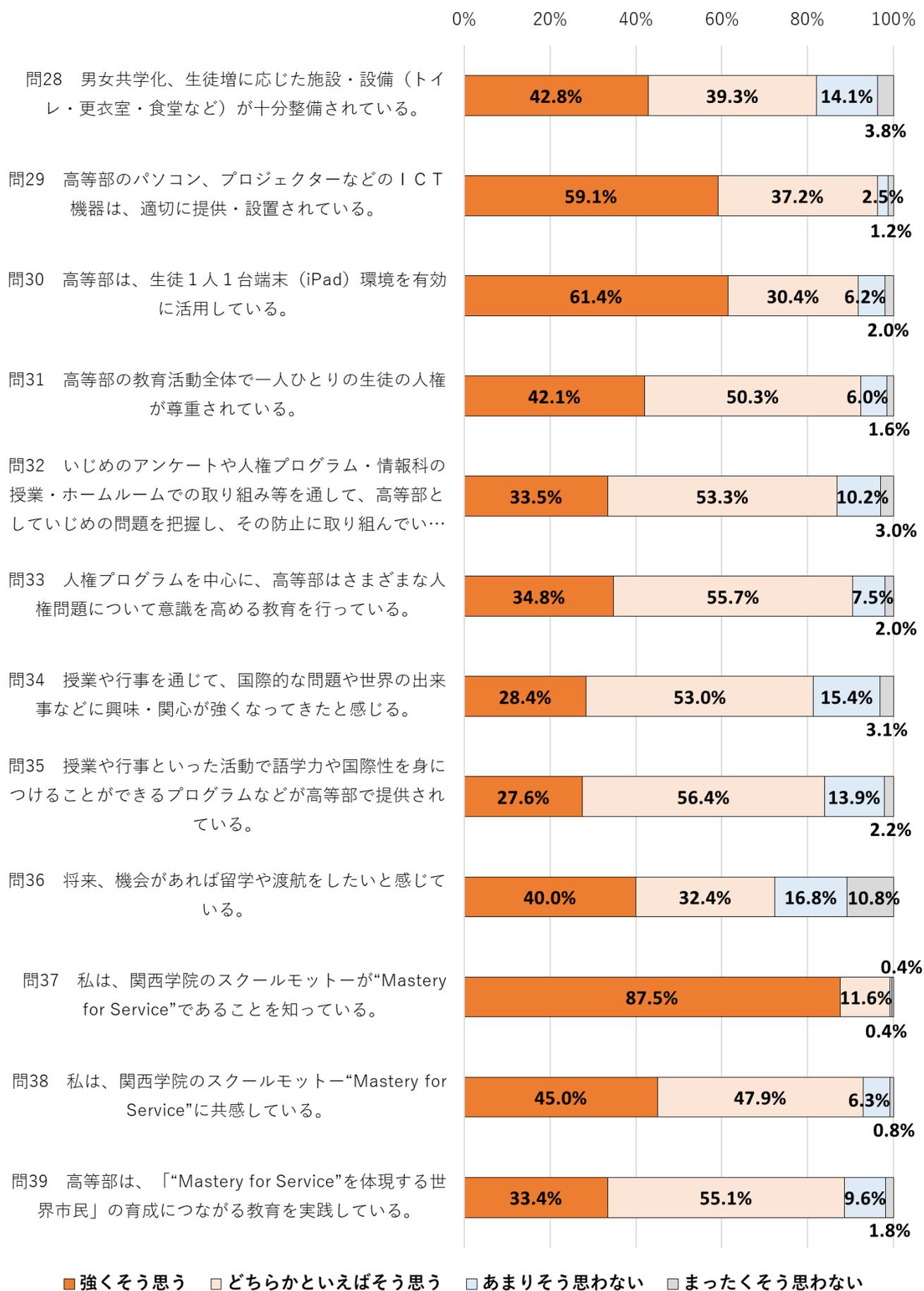
強く思う
  どちらかといえば思う
  あまりそう思わない
  まったくそう思わない

**2022年度 学校評価アンケート集計結果**  
**高等部・生徒（回答率100% 回答1,146人/対象1,146人）**

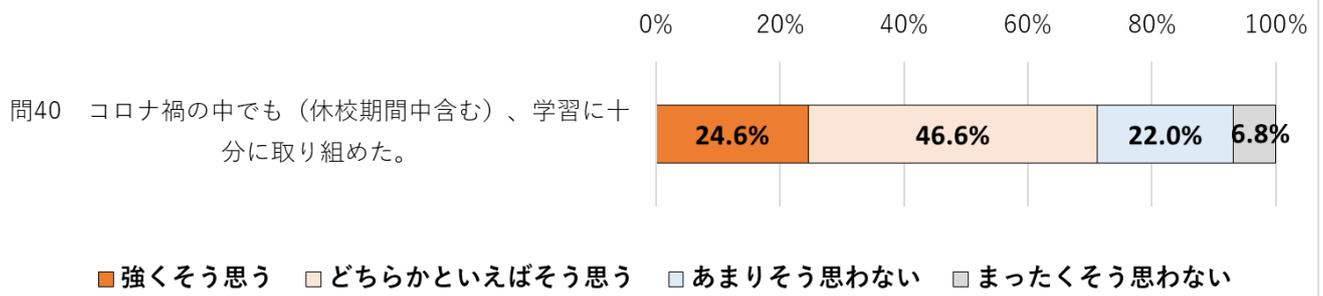


## 2022年度 学校評価アンケート集計結果

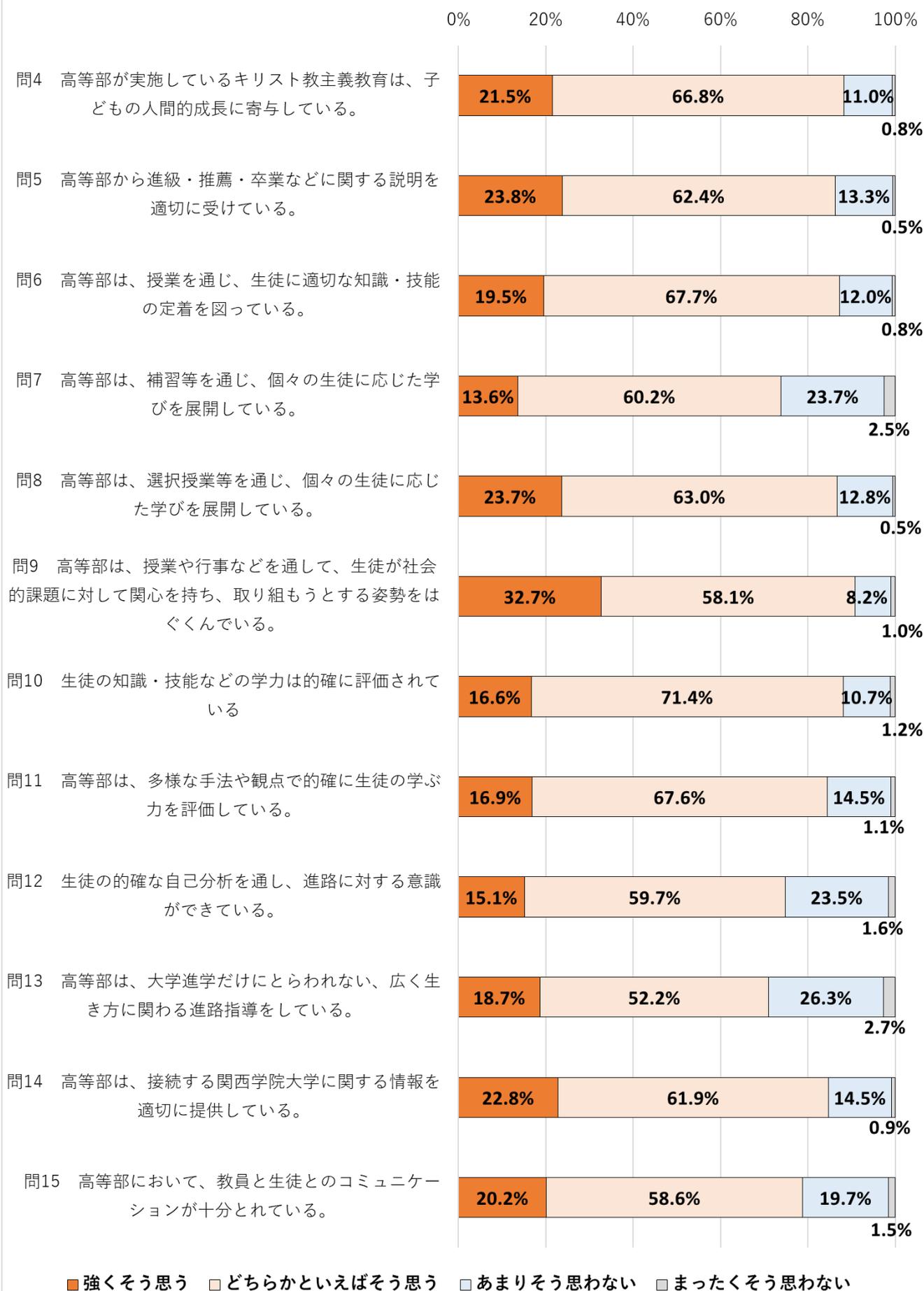
### 高等部・生徒（回答率100% 回答1,146人/対象1,146人）



2022年度 学校評価アンケート集計結果  
高等部・生徒（回答率100% 回答1,146人/対象1,146人）



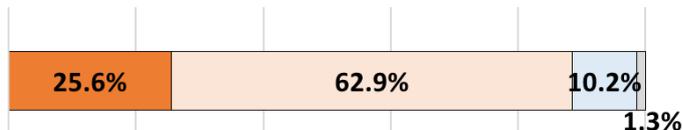
2022年度 学校評価アンケート集計結果  
 高等部・保護者（回答率 79.7% 回答913人/対象1,146人）



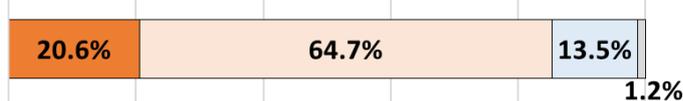
**2022年度 学校評価アンケート集計結果**  
**高等部・保護者（回答率79.7% 回答913人/対象1,146人）**

0%      20%      40%      60%      80%      100%

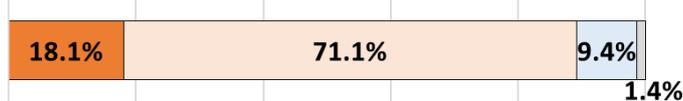
問16 高等部は、校内・校外問わず挨拶・時間厳守・美化など社会的基本ルールを適切に指導している。



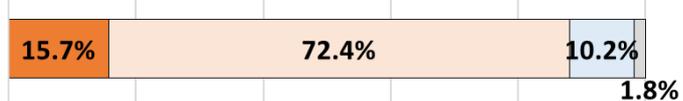
問17 高等部は、生徒が規則正しい生活が送れるよう適切に指導している。



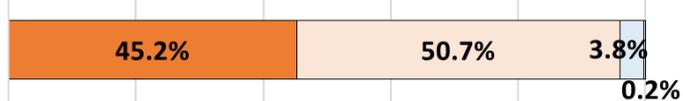
問18 高等部は、不正やいじめに毅然と対応している。



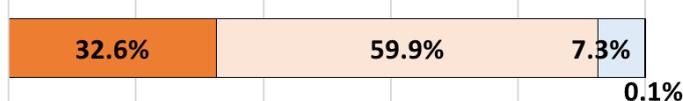
問19 高等部は、生徒のトラブルや問題行動などに対して、迅速かつ適切な対応をしている。



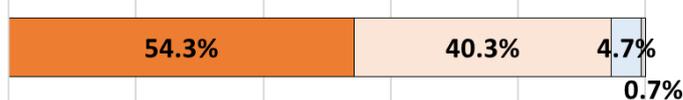
問20 高等部は、多様な学習内容・学習形態に応じた施設・設備を整備している。



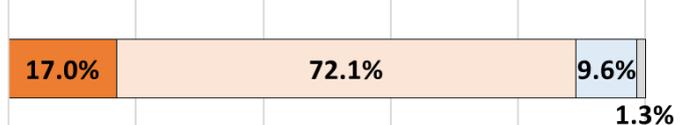
問21 高等部は、男女共学化、生徒増に応じた施設・設備の整備を行っている。



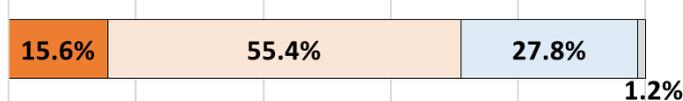
問22 高等部は、生徒1人1台端末（iPad）環境を有効に活用している。



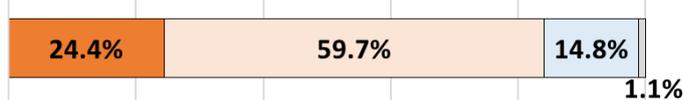
問23 いじめのアンケートや人権プログラム・情報科の授業・ホームルームでの取り組み等を通して、高等部としていじめの問題を把握し、その防止に取り組...



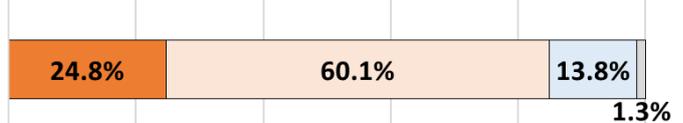
問24 生徒自身が種々の人権問題について、より関心を持つようになったと家庭で感じる。



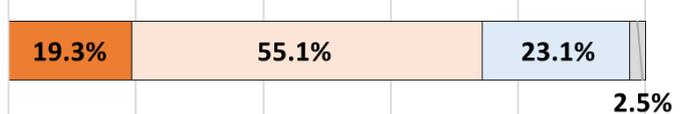
問25 高等部は、授業や行事を通じて生徒の国際的な問題への関心を高める努力をしている。



問26 高等部は、授業や行事を通じて、語学力向上を図るとともに、生徒が国際性を身につけることができるプログラムや教育環境を提供している。

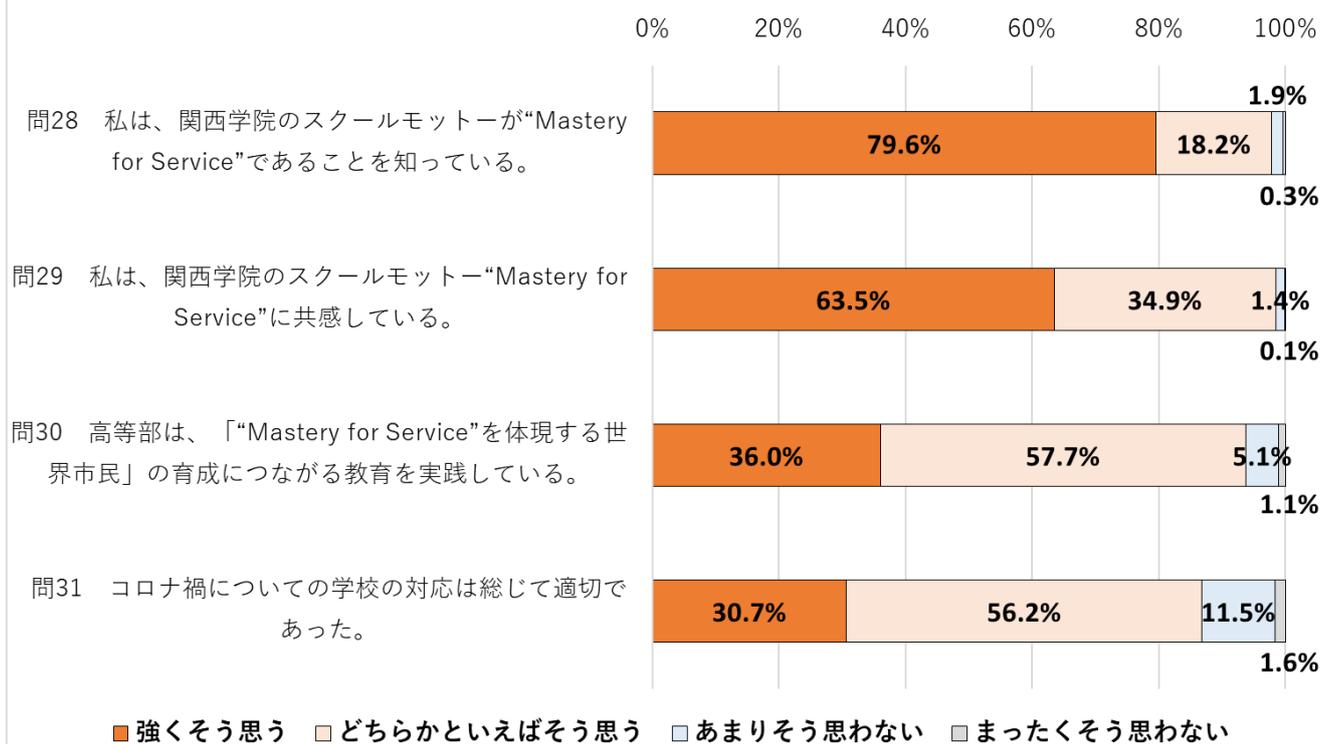


問27 高等部は、授業や行事を通じて生徒が留学や渡航したいという意欲を育てている。

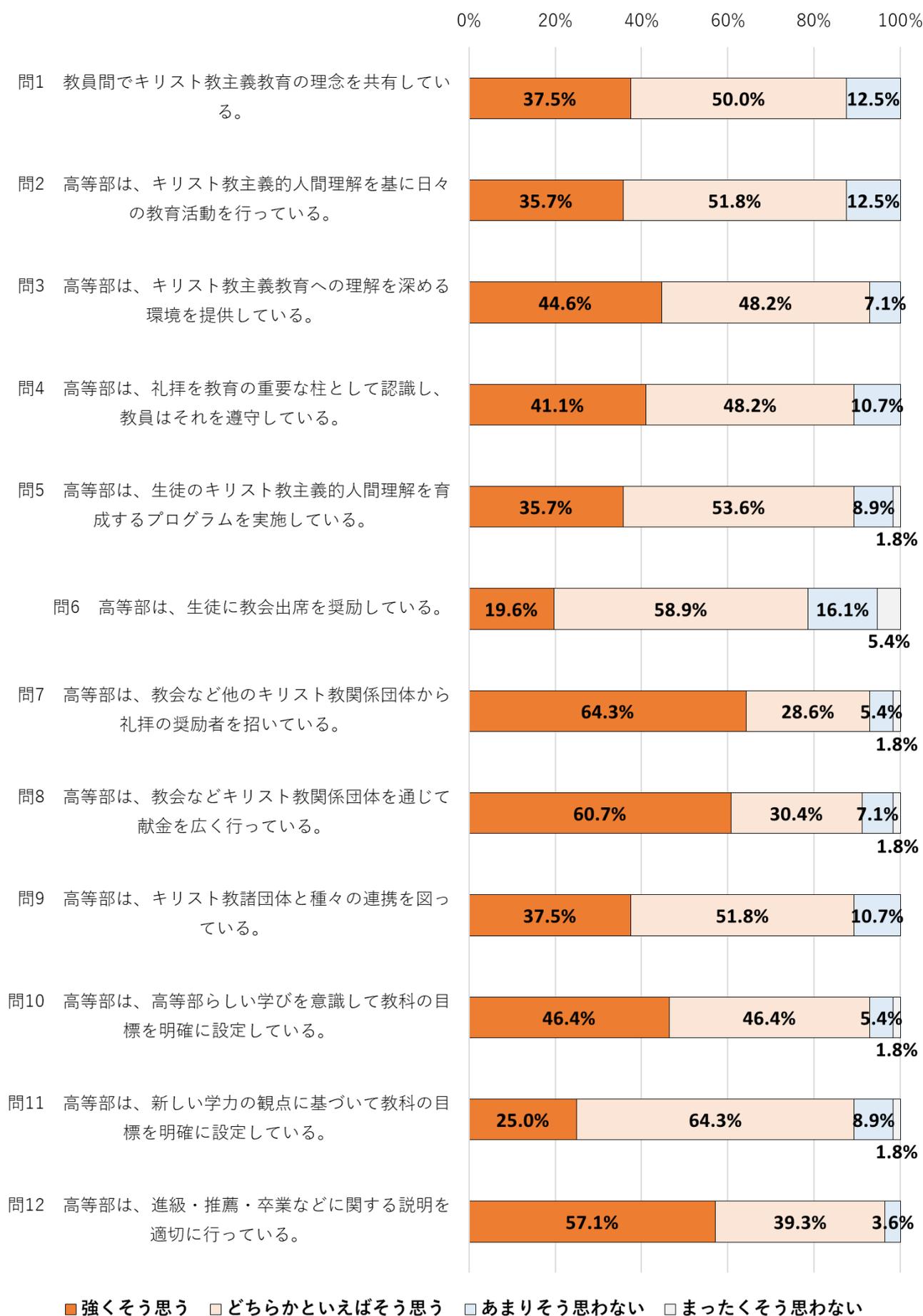


■ 強く思う    □ どちらかといえば思う    □ あまりそう思わない    □ まったくそう思わない

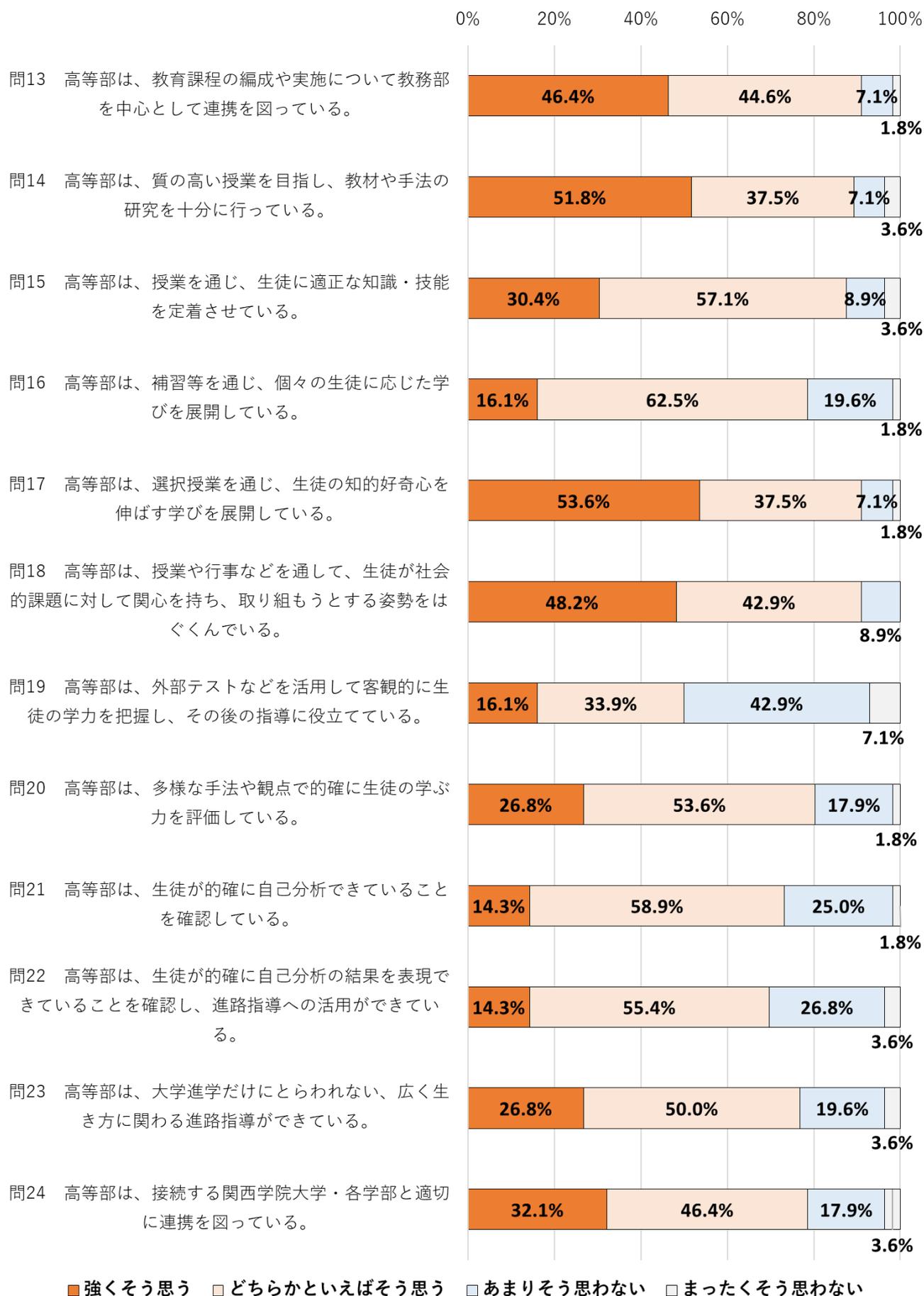
**2022年度 学校評価アンケート集計結果**  
**高等部・保護者（回答率 79.7% 回答913人/対象1,146人）**



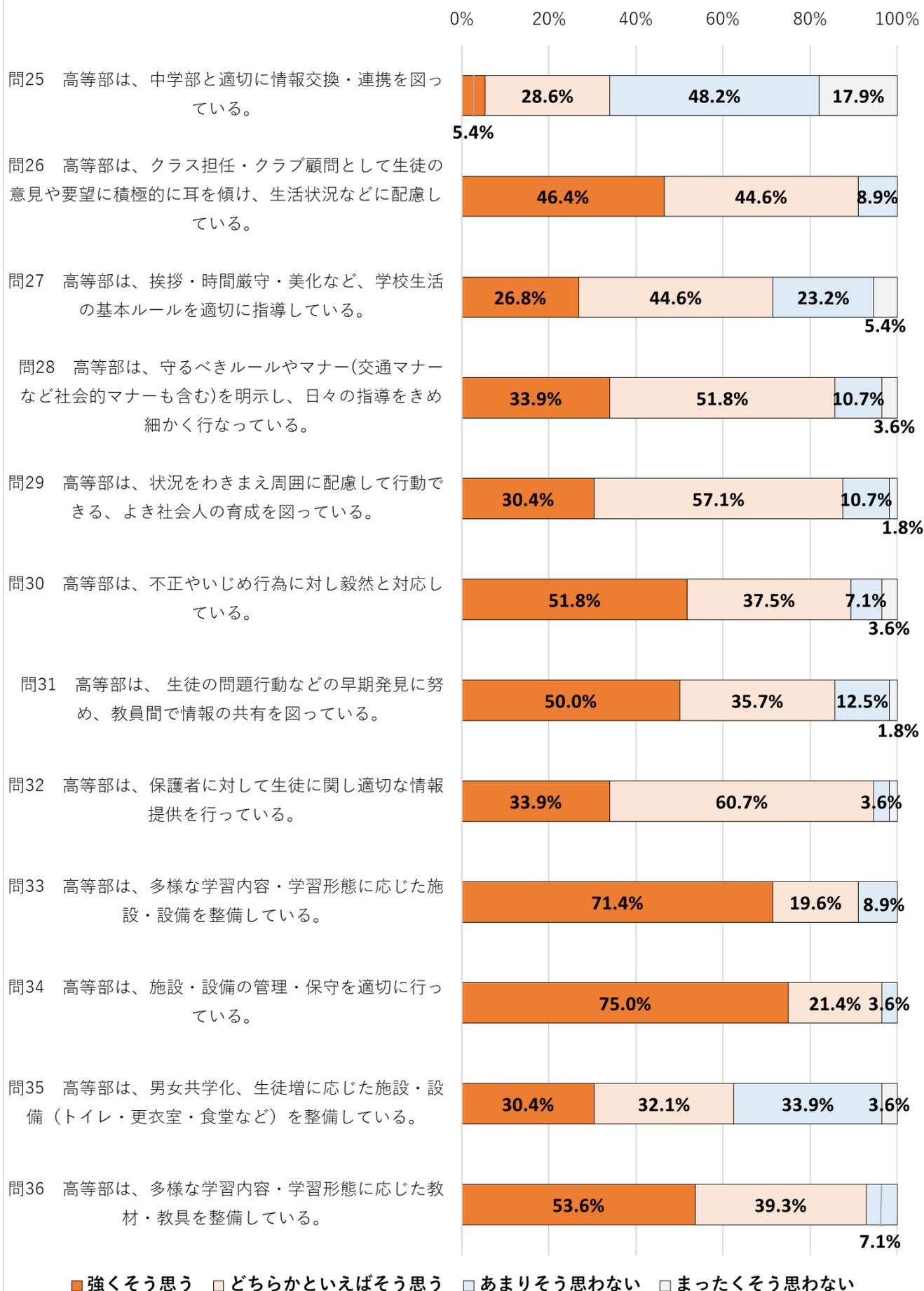
**2022年度 学校評価アンケート集計結果**  
**高等部・教員（回答率 100% 回答56人/対象56人）**



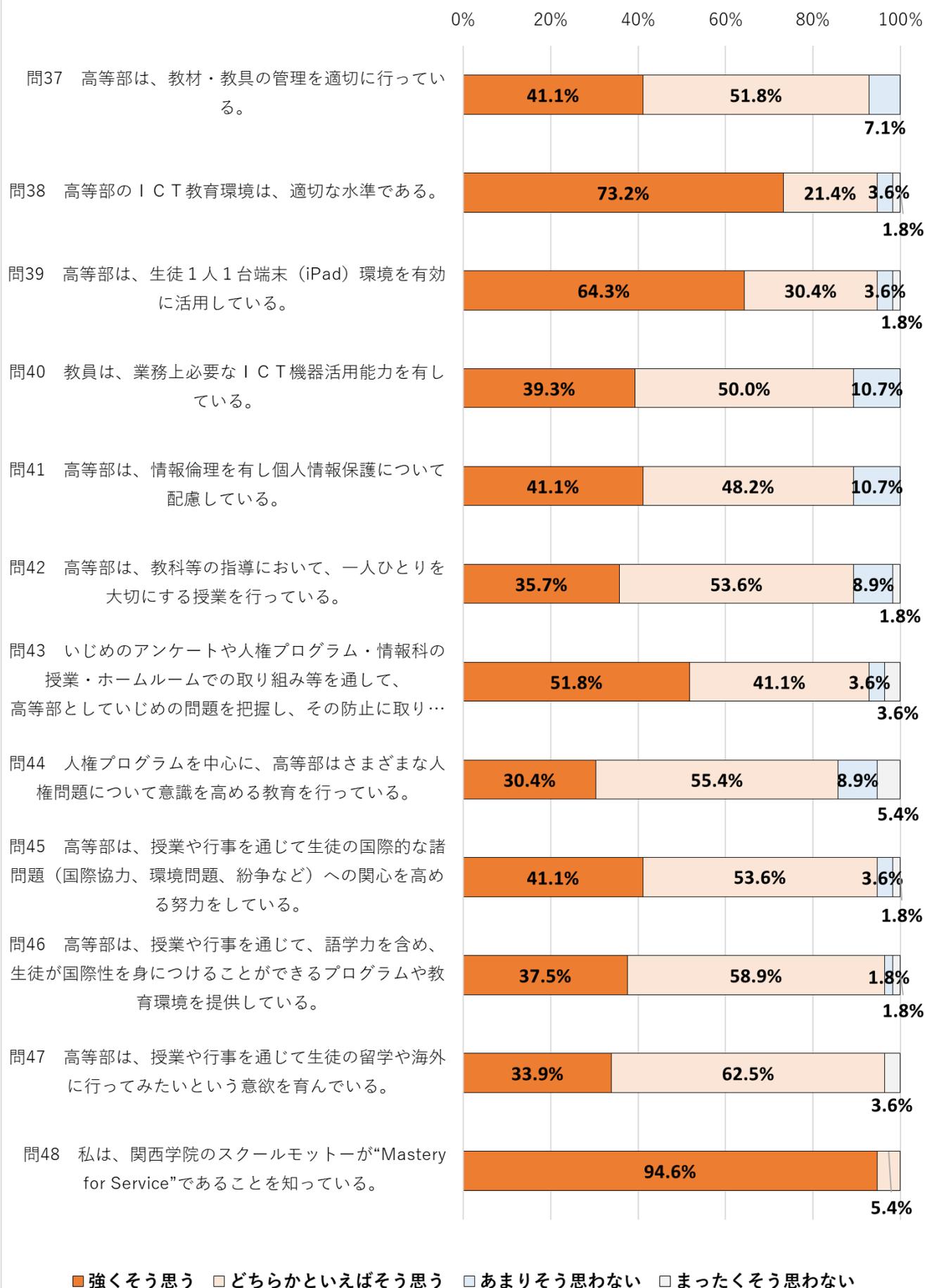
**2022年度 学校評価アンケート集計結果**  
**高等部・教員（回答率100% 回答56人/対象56人）**



**2022年度 学校評価アンケート集計結果**  
**高等部・教員（回答率 100% 回答56人/対象56人）**



**2022年度 学校評価アンケート集計結果**  
**高等部・教員（回答率 100% 回答56人/対象56人）**



**2022年度 学校評価アンケート集計結果**  
**高等部・教員（回答率 100% 回答56人/対象56人）**

